

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

高校山岳部での安全対策――長野県の場合 その2

夏合宿を終えると、文字通り新チームが活動。次年度に向けての第3タームの活動を始める。ここでは秋の連休を活用しての2泊3日の合宿と新人大会を目標とする。3年生が実質的に引退した後の、新メンバーでのチームワーク作りやモチベーション作りが重要な要素となる。同時にクライミングや沢登りなど、登山の様々な技術について体験させたり、向上させたりする期間でもある。

11月の声を聞くと長野県では、早い年には雪の便りも聞かれるようになる。第4タームは冬の活動となる。冬の活動については、文科省スポーツ・青少年局長より毎年、「高校生及び高等専門学校生(1年生から3年生)以下については、原則として冬山登山は行わないよう御指導願います。」という通知が出されている。しかし、この通知は冬山での活動の全面禁止を言うものではない。本校での冬季の活動は、この通知を念頭に置いた上で、山岳部の活動として、登頂を目的としない訓練・研修ということで計画をし、理解を求めて実施している。また、計画に当たっては、ステップアップをしながら、雪山での様々な生活技術の向上を図ることを目的としている。冬山と一口に行っても年により、また山域により、極めて多様である。山岳部の活動として、安全にしかも楽しくできることも多い。しかし、一般的には冬山イコール危険という刷り込みにより、イメージのみが先行して本来の楽しさが奪われている現状もある。現に全国の高校山岳部の顧問に聞くと、「冬は活動をしない。」「禁止されている。」という声も耳にする。本校の場合、まずは12月初旬の身体慣らしからはじめ、日帰りでの低山ハイク、安全が確保できるスキー場近くの尾根などでの一泊、雪遊びを交えながらの雪洞やイグルー作りや歩行技術訓練、日帰り山スキーを経て、3月末には山スキー合宿(雪洞もしくはイグルー泊)へとつなげていく。もちろん全員がスキーをするわけではないので、つば足でも参加できるような内容での実施である。

その他、通年で行う活動として、クライミングなども取り入れながら全人的な教育の一環としてのクラブ活動を実践している。

Ⅲ. 安全登山のための手立て



以上、通年の活動の基本的な流れを示した。しかし、これらの活動については、先に述べたように引率者に問われる責任も重い。私は安全登山の観点から、次にあげた諸点を原則として課す中で、学校、保護者の理解³⁾を得ながら行っている。以下その手順を示す。

①顧問の体制

本校では校務分掌上、山岳部の顧問は3名であるが、その他に県のスポーツエキスパート活用制度⁴⁾を利用した外部指導者に指導を依頼して4名体制をとっている。実際の山行の際には、特別の場合を除き、安全管理上必ず複数で引率する。留守本部は学校におき、教頭が連絡窓口となる。また、顧問の力量を高めるために、可能な限り研修等にも参加するようにしている。県内の研修としては、長野県山岳総合センターの研修（5月）や、後述する地区の安全登山研究会による自主研修（10月または11月）などがある。

②家庭の理解を得るための方策

本校では、毎年4月中旬にクラブ結成が行われ、高校3年間（実質的には2年数か月）の活動はここから始まる。高校のクラブ活動は、生徒の自主性に恃むものではあるが、自然を相手にする山岳部においては、安全管理の面から顧問主導による一定の譲れない線を示すことも肝要だと考える。そこで、クラブ結成においては、最初に私がクラブ指導をするにあたっての基本線をまず示す。そのポイントは、「『安全登山』を基本にアルピニズムを追求し、『自立した登山者』をめざすという活動であること」と、「高校生活をきちんと送ることが、クラブ活動を続ける上での最低の前提条件であること」という2点である。クラブをやる前に高校生としてやるべき義務を果たすこと。これは社会人の山岳会とて同じことであろう。良き社会人は良き登山者であるのと同様、良き高校生は良き登山者たり得る。そして、その上に立って安全登山を追求する活動であること。これをまず意識づけることで、学校からも保護者からも理解を得られる活動が可能になる。このことを生徒はもちろん、保護者にも文書で明確に伝えて活動への理解を求める。その上で、文書で年間計画のアウトラインを渡す。さらに、自然が相手である以上、リスクを伴った活動でもあることを、目を背けることなくきちんと伝え、活動する上での前提条件として、山岳保険への加入を義務付ける。このことは、自分自身への戒めともし、毎年学年を問わずすべての生徒・保護者との間で確認をする。

冒頭述べたように「楽しそうだから」というような理由で入部してきた生徒や、仲間との関係で入部を希望して来たというような若干目的意識が希薄な生徒などには、歓迎はしつつも安易に受け入れることはせず、山のすばらしさと厳しさの両面をしっかりと伝え、目指すものが「自立した登山者」であることを生徒・保護者双方に丁寧に説明した上で、入部を認める。また、装備の面や合宿における金銭的な負担についても、最初に明確に示して、理解を求めている。

③具体的な山行の検討と実施

年間の計画を立ててきちんと方向性を示すということは、クラブ活動を通して何を目指すのかを、共有することでもある。その上で個別の山行については生徒と顧問で計画を練り上げていく。具体的には、毎週定期的にミーティングを行い、ここでは社会人山岳会の例会同様に計画書作りと各山行後の総括と報告書作成を行う。計画書作りと同様、報告書作りも重要なポイントと位置付けている。前回の山行の総括をし、反省事項の洗い出しをする中で出てきた体力や技術力の不足や失敗は、次回までに少しでも補えるような活動やトレーニングとして活かし、それを次の計画に反映させることで目的をもたせることができるからだ。1ヶ月に1回の山行をそれだけで終わらせずに、「計画→実行→総括→錬成」というサイクルの中に位置付けることで、全体の活動の活性化をももたらすことになる。（以下次号）